

親鸞の生涯 32

法然上人のこと

(前号、歎異鈔に「たとい法然聖人にはされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」とまで親鸞さまが心酔傾倒なさった法然さまのことがありました。) 「大乗」誌(6月号)の三栗章夫氏の「法然聖人の出家」の文を借用して概略紹介します。

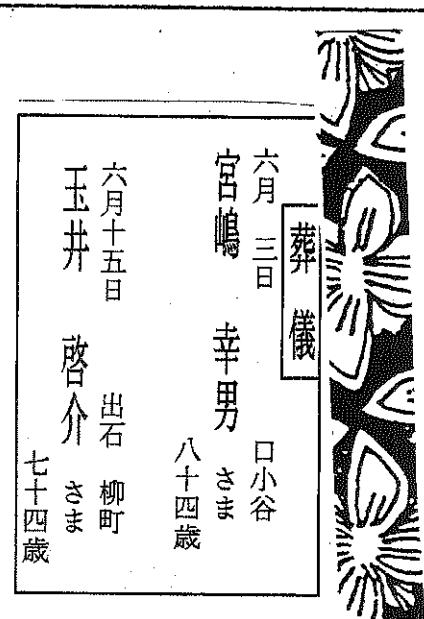


鳥羽上皇の院政期、保延七年(一一四一)の春。法然九歳。美作の国久米郡の押領使(おうりょうじ)(郡の治安警察の長)であった父漆間時国が、明石源内定明の夜討ちにありました。莊園という支配圏をめぐっての紛争が原因であったようです。そのとき九歳の法然は、秦氏(霍金)の母と共に竹藪に隠れ、小矢でもって定明の眉間に射当て、定明をその國から追い出しました。しかし、夜討ちに会って深い傷を負った父時國は、九歳の聖人に對し次ぎのように遺言しました。

「私はこの傷では助からない。しかし、お前は決して相手を恨んではならない。もし敵討ちということになれば世生生戦いは同じです。私が命を惜しむように人もまた命を惜します。すべて我が身にかえつて人の思いを知らなければなりません。どうぞ貴方、成人して往生極樂を願い、自他一如・怨親平等の世界に生きてください。」といつて西方に向かつて高らかに念佛しつ命絶えました。

事実、法然様は、父との死別後すぐ、美作の國の菩提寺にはいり、母の弟觀覺の弟子になりました。やがてその非凡な才能を見た觀覚は、法然を比叡の山に上げることとしました。そのとき別れを惜しむ母に対し法然は「三界を流転しながら煩惱の世界に生きている私たちは愛別離苦から離れることは出来ません。親子恩愛の情も断つことのできぬ私たちは、ただ如来さまのご本願の働きによってこそ真実の報恩ということもかなうのです」といつて、ひたすら仏道への悲痛な決意を示したといいます。

こうして法然は久安三年(一一四七)の春、延暦寺西塔の北谷の源光のもとへ入室。さらにその勧めで圓円につきて天台三大部とその注釈書六〇余巻を読破。しかし法然は世の榮達を望まず、西塔黒谷に入つて叡空から真言大乘律の奥義を伝授され、また、同じ黒谷において源信僧都の二十五三昧会



に入り僧都の往生要集によつて淨土往生をねがい不斷に念佛称名をつとめました。このとき師の源光・觀空からと、また「年わかくして仏道を志すとは法然道理(仏法に生きる)優れた人物である」として源空法然と名付けられたと申します。

七月 文月 のこよみ	
二日	あすなろ(録音)
三日	豊岡病院検診
四日	出石組総代研修会
五日	出石組佛壯紹合会(勝林寺)
八日	おみがき清掃奉仕
九日	出石病院検診
十日	永代経(午前)
十一日	永代経(午後二時)
十二日	正福寺永代経
十三日	正福寺前住十三回忌
十四日	宮嶋幸男さま忌明法事
十八日	山田昭二氏宅法事
十九日	出石組連研(勝林寺)
二十日	福富剛氏宅法事
二五日	小林家一周忌
二六日	前坊守命日
二七日	寺族同朋講座
二八日	山本トツ子さま法事
二九日	村田元子氏宅法事
三十日	みのりを聞く会
三〇日	あすなろ(編集)



法然は一生の間「父の遺言忘がたし」と述懐したと言います。これが法然さまの求道の出発点でありました。以後「悲しきかな、いかがせん。わたしは仏教の基本をさえ行ずることが出来ない。わたしの心に相応する教えがあるのだろうか。我が身がはいなかつた。嘆き嘆いて、結果、自分みずから直接、釈迦の教えの蔵にはいって、ひとり悩み、一人探求した。」と当事の心境を述べられています。

この善導大師の教えに出合つた法然様は、そののち「偏依善導一師」(わたしはただひたすらに善導さまお一人を師と仰ぐのみ)と言つて、ひたすら選択本願(如来さまの本願によつて選ばれた)念仏(ほとけのみ名呼ぶ者すべてをすくう)の教えに、自らも生き、人にも教えてくださいました。

「一心に弥陀の名号を専ら念じ、行住座臥、どんなときにも、いのちの長短にかかります。なぜかといって、阿弥陀様の建てられた本願にまるごとくなうからなのです。」この善導大師の教えに出合つた法然様は、それを(往生間違ない行業)と言うのです。なぜかといって、阿弥陀様の建てられた本願にまるごとくなうからなのです。」

そののち「偏依善導一師」(わたしはただひたすらに善導さまお一人を師と仰ぐのみ)と言つて、ひたすら選択本願(如来さまの本願によつて選ばれた)念仏(ほとけのみ名呼ぶ者すべてをすくう)の教えに、自らも生き、人にも教えてくださいました。

「永代経」のこと



ことし、勝林寺の永代経は七月の八日。

「永代経」ってなんのための法要でしょうか。

仏教が日本に渡来する前の中國で始められた仏教行事です。日本もどの仏教宗派でも（その名称は違つても）一般に當ります。

元もと「永代祠堂經」といいます。

祠堂というのは祖先の位牌をまつるお堂のことです。世代がかわってもいつまでもかわらずご祖先様の供養のためにお経をあげていただることを寺院に依頼しておくるのです。そのために相当額の金品を寺に納入します。それを「祠堂錢」また「永代経志」と言い、寺の運営資金となっていました。

以上でお分かりのように、永代経とは祖先供養のためのお経を永代読誦してもらうための法要でした。

ところが、淨土真宗では、本来、人のために祈願をしたり冥福を願うために読經したり念仏を称えることは致しません。祈願祈祷の宗教ではありません。

「称えて聞く」ものなのです。
「経」はストラといい「ここをよりどころにしなさい」と示された釈迦の説法です。お釈迦さまは亡くなつてもその教えは今も「お経」として残っています。それを読んでその教えを聞く。またそれを解説するお説教を聞く。これが「経」の本来の意味です。

それと同じように「南無阿弥陀仏」といふ名号は、ほとけさまの「なりり」であり「呼び声」です。「いつでも、どこでも、だれでも」と呼んでくださる如来さまの「おしえてくださいた方が親鸞さまです。」「呼び声」ですから、「ただ名号を聞け」とおしえてくださいた方が親鸞さまです。

四苦八苦といいます。

生（生きていくことの苦しみ）、老（老死（かならず死なねばならぬ苦しみ）、病（心身が病むつらさ）、死（かならず死なねばならぬ苦しみ）、病（心身が病むつらさ）、愛別離苦（愛するものが別れなければならぬ苦しみ）、怨憎会苦（憎み合いながら一緒に暮らさねばならない苦しみ）、求不得苦（ほしいものが手に入らぬ苦しみ）、五蘊（混迷なこの時代のなかにあって、四苦八苦、苦しみ迷い悩み惑いながらいるこのわたしに「ここをよりどころに」と呼びかけてくださる永遠無限の声「南無阿弥陀仏」）

（帰命無量寿如來・南無不可思議光如來）をみんなで共に同心に聞きましょうとつとめるのが淨土真宗の永代経でなければなりません

やなぎの下のどじょう
一度 やなぎの木の下で どじょうをとつた
いつも、やなぎの木の下にどじょうがいるものだと 決めてしまふやつは おろかもの。

あの八幡さまへ合格祈願の絵馬を奉納して大学進学を果たした先輩のまねをして、神頼みばかりしている愚か者。

細な・実はやさしい人なんだ

「むしろ、この人は、自分の病氣障害についての、周りの人たちの目におびえ、ついに虚勢を張っているだけ。ところがそれだけに、自分と同じ病気の、言葉を失ってしまった人は、人に目立たぬところで、ひそかにそつとやさしい心遣いを向け、時にはあたたかな言葉もかけている。」

ことわざ

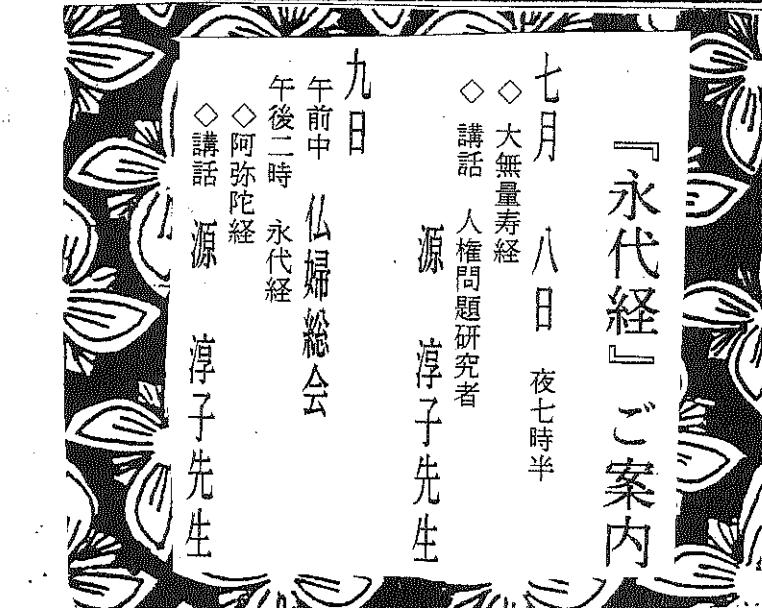


出会いったことば

「人の欠点に苛立つより
人の長所に感動しよう」

今朝出会った日めくり式のカレンダーの「とば」です。

「人の欠点に苛立つより
人の長所に感動しよう」



『永代経』ご案内

七月 八日 夜七時半

◇講話 人権問題研究者

源淳子先生

午前中 仏婦縁結会
午後二時 永代経
◇講話 源淳子先生

失敗は成功のもと

何回か失敗しても投げ出してもダメ。
がんばついたら、そのうち、キット成功するさ。

世界に冠たる我が国の中小企業の技術力はこうしてできあがつた。

火の用心、戸の用心
足もとから 鳥がたつ

昭和初期。こどもたちが拍子木たたいて夜回りをしたよ。そのときの呼び声。
危険なことは身近にあるよ。油断大敵。

私たち、乱暴なことを言ったり、身勝手な振る舞いをしたりする人の、その表面の言動だけしか見ていかなかったのではなかろうか。表に現れた言動の影に、だれでもみんな、人としての苦しみや悲しみや悩みを持つている。そしてそれだけ外には出せない優しさ暖かさを持っている。

ひそかに抱いているその悲しさ優しさあたたかさを見ないで、そこに現れた言動を非難したり毛嫌いしているそのわたしの方が、人間として、また、仲間として、間違っていたのではないか。

今朝のカレンダーの言葉を見て、私づくづく自分に恥ずかしさを感じました。